

果樹の木を活用した木の葉皿



果樹の木は、木製品をつくる木ではないため曲がったりくされたり、虫が入っていたりします。

そこで、大きな製材が取れないときは、小さな角材にしてなるべく活用します。

- 1 果樹の廃材を収集します。
- 2 間引きした小さな木を3センチの角材にします。
- 3 3センチの角材を色が模様になるよう並べて張り合わせます。
- 4 張り合わせた板を対角線に切って張り合わせます。
- 5 木の葉の形の皿を作ります。



- 6 食器専用の塗料を7回塗り、安全で丈夫な皿が完成します。



- 7 完成品
木の張り合わせで色々な模様になります。



農の多様性、自然の恵みを現代に活かす
日本は古来より、副産物をつまく利用し、生活をしてきた。一番身近なものは、お米の稲。収穫を終えた稲を干し、わらじやみの、米俵などにも利用していた。

その、従来の副産物のように「くだものうつわ」は、果樹の役目を終え、廃材となった木を利用することで、処分時にかかる費用の負担が減り、資源となつて、生活の中の身近なものへと生まれ変わる。それは、新たな価値を生み出している。木のうつわはいろいろあるが、果樹

を素材にしたうつわは全国でも珍しく、果樹栽培の盛んな土地ならではの取組である。地域に密着した活動があるからこそ、従来の資源を新たな発想で地域貢献へと繋げ、現代に活かすことができる。そんな地域が増えることを期待したい。



お問い合わせ先

くだものうつわ 上山市金瓶水上6-2 Tel 023-672-5861

果樹から生まれた新たな特産品

くだものうつつわ

写真は木の皿（うつつわ）です。
「このうつつわの材料は何かご存知でしょうか？」



役目を終えたさくらんぼやラ・フランスなどの果樹の木です。

本県は、多くの果実に恵まれた日本でも有数の産地。その産地のひとつ、上山市では、さくらんぼやラ・フランスの剪定された幹や枝を使い、写真のような、うつつわを制作している。

本来、果樹の木は、木製品をつくることには向いていないが、剪定時に廃材となる枝や幹を使い、新たな資源として活用し、地域の新たな特産品を目指して取り組んでいる。その「くだものうつつわ」は、上山市の地域グループ「上山まちづくり塾」という、まちづくりの活動のなかで生まれたアイデアである。

**好奇心と
地域活性への想いが
アイデアへ**

きっかけは7年前。まちづくり塾の交流先の木工作品に出会い、



「まちづくりの活動に活かせるのでは。」とメンバーの小関さんが思いついたことから、ここまでのかたちになった。

「くだものうつつわ」は現在、上山市内にある4つの保育園で園児用の食器として利用されている。また、鶴岡市にある奥田シェフの店、アルケッツチャーノでは、うつつわやスプーンなどを取扱っており、県内外でも、上山市の観光物産品として展示販売、飲食店などでも取扱店が増えている。